

楽しい学び **de**

Vol.10

クラスをつくる



大滝 文平

祝10号!

大塚俊明先生(鎌倉女子大学教授)と
本誌メンバーとの座談会スペシャル

特集2本立て

- ①今! 教師に求められる資質とは
- ②やっぱり社会科は面白い!

2023年に創刊された、本誌「楽しい学びdeクラスをつくる」も、おかげさまで10号を迎えるこ



大塚



大滝



武藤



山本



石川



引田

とことができました。そこで、本誌メンバーでこれを勝手に祝うべく、我々が長きに渡りお世話になっている、社会科の大先輩!大塚俊明先生を迎え、座談会を開くことにしました。

大塚先生は、横浜市の教諭として横浜市社会科教育研究会でご活躍され、指導主事、管理職を経て、現在は鎌倉女子大学教授と兼任して鎌倉女子大学初等部部長を務められています。本誌も読んでくださっており「ちゃんと書けよ!」なんて、温かいエールをいただいたことも!大塚先生の大学や初等部での教員養成の視点から、「特集① 今! 教師に求められる

資質とは(p.2~p.5)」と、ご専門である社会科教育について「特集② やっぱり社会科は面白い!(p.8~p.11)」と題して語っていただきました。

当初は座談会と称していたものの、大塚先生のお話に引き込まれ、気がつくとすっかりインタビューになっている場面も多々あります。どうぞ、大塚先生の教育界、社会科に対する熱い思いを感じ取ってください!

では、次ページより、始まり、始まり~ (横浜市立森の台小学校 大滝 文平)



鎌倉女子大学教授
大塚俊明先生

日本文教出版のWebサイト

日文 🔍



祝10号!

大塚俊明先生
と
楽しく学ぼう!



心が動く、その先へ。

日本文教出版

特集① 今！教師に求められる資質とは

① 大学の教員養成について ～キーワードは「子どもの発見」～

大滝：現在は鎌倉女子大学教授と初等部部長の兼務とのことですが、学生への教員養成では、どのようなことを心掛けていますか？

大塚：学生には子どもとともに過ごす喜びを伝えるようにしています。特に「子どもの発見」をキーワードにしています。「この子ってこんなところがあるんだな」という発見は、教師としてすごく魅力的なことです。だから、「子どもってこういうふう考えるんだよ」と、具体的な話をよくします。キーワードは「子どもの発見」かな。

大滝：子どもとともに実践をされてきた先生だからこそ、発見の具体を伝えられるのですね。ところで、今、教師を目指す学生は、どのようなモチベーションを持って臨んでいると感じていますか？

大塚：教育学部では9割ほどが教員採用試験を受験します。一人ひとりが自分の小学校時代とか中学校時代の素敵な先生との出会いを記憶として大事に持って、それがモチベーションとなって教師になろうという学生は多いと思

います。反面、近年、採用試験の倍率が低下傾向にあるためか、簡単に教師になれると考えている学生が増えたような気がしています。そうすると、自ずと勉強量も減る。これは大きな課題だと感じます。

大滝：なるほど、課題の点は全国的な問題ですね。それでは、教師の資質として、「この学生は将来良い先生になるんじゃないかな」と感じることがありますか？

大塚：私の授業は結構授業記録を読むようにしています。そうすると、授業記録の中でさっき言った「子どもの発見」をする学生がいます。例えば、「この子はこういう考え方を持っていたんだけど、あるAさんの発言でその後こう発言しているってことは、ここが変わったんじゃないか」というようなところまで読み取れる学生もいます。つまり、物事を具体的に考えようとする学生かな。そういう学生は伸びると思うし、期待しちゃいますよね。



② 模擬授業ってやってますか？

大滝：具体的な子どもの姿に関連している、実践的な授業が大切だと思うのですが、学生が子どもの前で授業をしたり、学生同士で授業（模擬授業）をすることはありますか？

大塚：教職認定基準に関連して、確か模擬授業などの実践的な活動が取り入れられているか厳しく見られる制度になっています。だから今は、社会科教育法などの模擬授業をものすごくやるわけ。実際は、40人の受講学

生が模擬授業をやるので大変ですが、試行錯誤をしながらやっています。ただ、短い時間でも全員が模擬授業する形になってきますね。

大滝：模擬授業形式の実践を大切にしているのは、我々の頃とは違いますね。とても良い傾向だと思います。それでは、模擬授業の時はどのような視点で学生に指導や助言をしているのですか？

大塚：「子どもが発言したことをすぐに評価して返すな」というのはすごく強調して伝えています。子どもの話をちゃんと聞いて、この子はこういうことを言うんだらうなど、一瞬立ち止まって考えてから返しなさいと。そして、「〇〇さんはこういうふうに言ってたけど、他の人たちはどう考えるんだらう」って返し方をしなさいと言っています。いちばん大切なのは、子どもの話をちゃんと聞いて、他の子に返してあげるということ。「その通りだね」とすぐ肯定したり、「正解です」なんて言っちゃったりしたら、授業はそこから深まることはない。

同様に「子どもが挙手したらすぐに指名しない」ということも言っています。学生も挙手されると嬉しいしホッとするからすぐ指名する、発問の後の間を待てない、これらは、教師もできていないと感じることがあります。

また、「なぜ、どうして」ってできるだけ子どもに聞くなどよく話します。そんなこと言うと、学生は「キョトン？」としてしまう。そうじゃなくて「なぜ？」って子ども自身が問うようにさせる（子どもが問いを持つ）のが教師の仕事なんだから。

授業での具体ポイント3選

- ① 子どもの話を聞いて立ち止まる！
- ② 挙手した子どもをすぐに指名しない！
- ③ 安易に「なぜ、どうして」と聞かない！

③ 子ども理解を深めるために

武藤：模擬授業のことをもう少し教えてください。子ども役も学生がやるなど、役割を決めてやっているのですか？

大塚：最初は「子どもになりきって」と言っていたが、なかなか学生には難しいようです。でも、本当はそこをいちばん考えてほしいところです。「この子が何を考えているか」「なぜ、この子はこのような反応をするのか」、模擬授業を通して子ども理解を深めてほしいと思っています。

大滝：実際に目の前に子どもがいるといないのでは違いますよね。やはり、教育実習や教育インターンシップの場で、子どもの具体的な姿を見て、子どもから学ぶことが大事ですね。そこから、子どもがどう考えるかを深めてほしい。



大塚：「子どもはこうだ」などと一般名詞で考えてしまうと、子どもは一人ひとりまったく違うという現実を突きつけられる。理想と現実が違っていると。さっき言ったように、あらゆるところで「具体的に考える」ことが大事だと思う。

山本：学生は教育インターンシップや学校支援ボランティアなどで小学校に来る機会が今はとても増えましたが、その成果はどのように感じていますか？

大塚：個人差がとても大きいと思う。どんな動機や心構えで行っているかによって成果は違うのではないかと思います。ところで、インターンシップは単位制だが、それは実地経験を積ませたいという国の方針だよ。国は教員を養成するうえで、どんどん現場で経験していく



ことが大事だと考えているのでしょうか。教育実習を廃止するという議論もあると聞いている。教育実習ではなく、長期間インターンシップで学校に行かせるのがいちばん良いんじゃないかっていう考え方ね。学校として、その考え方はどう思うの？

大滝 : 良いと思いますが、4年間の後でやってほしいです。大学で学んだうえで、実際の学校現場で長期(1~2年)にやることで、教師としての資質を見つけてほしい。それは、自分自身はもちろん、学校現場の教師も見極めてほしいと思う。最近、経験の浅い教師の離職率が高まっている。(自分の資質)に気付く1年間はあってほしいです。

大塚 : 外に出て経験すれば良いわけではなく、その経験を基にしっかりものを深く考える習慣は、今の学生には大事だと思う。

④「今」求められる教師の資質とは

大滝 : だんだん話が本題に迫ってきたところで聞きます。これから求められる教師の資質について、どう考えますか？

大塚 : 教師としていちばん求められる資質について学生によく聞きます。多くの学生は「子どもに対する愛情」などを挙げます。

私の考える資質としてのキーワードは「探究」だと思います。自分の問いを大切に調べ、**ことを繰り返せる人**。実際に、今の授業で大切にされているのも、「探究」じゃないですか。だから、**教師自身に探究心があるべき**と考えます。しかし、教員採用試験の面接練習などで、「どんな力が教師



としていちばん必要だと思いますか」と聞いても、「探究する力」と答える学生はほとんどいませんね(笑)。

大滝 : 教師自身が教師としての問いを持ち続けるということですね。その「探究」の話につながるとは思います、「なぜ？」の積み重ねが自分の教師像に生きて形づくられるのではと思います。形式的な一面として、最近気になることがあります。若い先生は当たり前のようにグループ学習を導入している場面を多く見ます。大学でもグループ学習をさせていますか？

大塚 : 一斉授業が実質的な全員参加になっていないというのが背景にあるよね。目に見える形でなんか活動してるというのを保障するっていう。グループだったら喋るでしょっていう、そういう考え方はあるんだろうね。でも確かに、困るとすぐにグループ学習させるとするのは安直では。学生の模擬授業を見ていると、そんな場面がたくさんありますね。

石川 : グループ学習かどうかということよりも、しっかりものを考える場づくりの方が大事なような気がしています。**問いをどう子どもに持たせるかということに力を入れたい**と考えています。「**あの子のあの発言どう捉えたらいいのかな**」というような放課後の会議こそ学生さんに入っていたきたいと思います。そういう積み重ねがリフレクションもより具体的に話せるようになるのかなと思います。現場に行ってそういう話を持ち帰ってくる学生さんはいますか？



大塚 : そこまでは、なかなかないよね。それでも、大学時代のこうした経験は現場に出た時に生きてくるだろうね。

武藤 : 熱意のある先生が私の周りには多いです。グループ学習はあくまで手段であって、目的ではありません。それより、子どもたちが「**探究したい**」と**思っていることをしっかり見取って**いこうね、という話はよくします。

大滝 : 学生時代からかかわっている初任の先生がいます。模擬授業の練習を繰り返し行ったり、研究会に参加したりするなど、とても熱意のある学生でした。担任になってしばらくして子どものかかわりで相談を受けました。「私は今まで何でも努力すれば解決できると思っていましたが、今回は解決できません」。

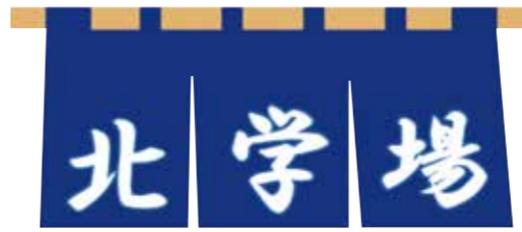
実際に教壇に立ち、理想としていたことと現実とのギャップに苦しんでいました。これは誰もが直面することであり、常に向き合っていくことが教師としての自分をつくり上げていくのだと思います。だから、とにかく**トライアンドエラーで、小手先で解決するものではない**と伝えました。

石川 : うまくいかないことを面白がれるようになる、初任校のうちに経験することが大事かもしれないですね。



みんなで楽しく学ぼう！先生たちの勉強の場(今年で9年目)紹介！

社会科を中心とした、子どもが主役の学びを創造し合う場。それが「北学場(きたまなば)」



参加費無料！
遅刻・早退OK！事前申し込みも不要！

北学場 〈連絡先〉大滝 文平
kitamanaba@gmail.com

横浜市北部(青葉区、都筑区、緑区、港北区)の社会科有志が中心となって発足した、緩やかなお勉強の場です。発足して9年目になりますが、今では横浜市内・市外の初任者をはじめ、経験の浅い先生、中

堅・ベテランの先生、管理職やOBの先生などなど、あらゆる立場の先生方がフラットな関係で、ざっくばらんに語り合っています。ご興味がありましたら、連絡(メール)をいただければ案内チラシを送らせていただきます。



「愛のチョークで引田が斬る！」

(横浜市立あざみ野第二小学校 引田 雄士)



もちろん今回は、大塚殿が**主役**じゃ！子どもや授業、これからの教育にかかわること、興味深いことをたくさん聞けたぞ！しか〜し、皆の衆がクラスづくりで日々悩み、苦しんでおるのに……大塚殿も山ほど失敗したに違いない！そこをどンドン斬っていくのが拙者のコーナー「愛のチョーク、見参！」

シャキーン！愛のチョーク！ 大塚殿だって、「授業で失敗」あるはずじゃろ！



吉田新田(4年社会科「先人による郷土の開発単元」)の目的を追究する研究授業で、子どもたちから「お米が沢山ほしかったんじゃないか」などの意見が出たが、いま一つ深みのある考えが出なかったので、「なぜ(他のものではなく)米なのか？」と発問したことがある。そうしたら、子どもが発言しなくなった。「なぜ米なのか」って、江戸幕府の経済的な仕組みだよな。「米はこの頃お金と一緒にあったんだ」という考えで簡単にまとまるとかと思ったけど、そうは問屋は卸さない。こうなってしまったのは、**目的にこだわってしまったところ**。子どもが自分の問題にしていなかった。



教師は「大人の言葉」でまとめてしまう。真面目な教師ほど、「教科書に書いてあるまとめの言葉が出てこない」というふうに考える。それは、**子どもが納得するということを大事にしていない**わけ。そういう授業を続けていると、子どもも何を言えば教師が納得するのかという思考になる。年間4〜5回の公開授業をしていたから、その頃の自分は調子に乗っていたかもしれない。



なるほど！大塚殿でもこんな場面が……講師の先生から「大塚先生でもこのような授業をしてしまうのですよ」と言われたそうじゃ。経験のある先生方はしっかりと自分の授業を見つめ直したいものじゃのう！(自分自身も肝に銘じないと……)

シャキーン！愛のチョーク！ 続いて二つ目じゃ！ちょっと斬るのはしのびないので、質問しちゃうぞい！ 教材探しのポイントは？



まずは、自分が面白いかどうかで判断している。それがまさに**教師の資質で語った「探究心」**なのではないかな。例えば、司法の学習では、裁判所の傍聴席の座る場所について、学生が持ってきた写真で知った。記者席が一番前であるなど、とても興味深かった。



教材を「自分が面白いかどうか」授業を考えるうえで、一番大切なことじゃ！忙しいと、このことをつい忘れてしまうことが……今回も斬ることができなかつた！(当たり前か。今回は斬ることなどできぬ!!!) 無念！それでは御免！

MASAYA presents

僕も、僕以外も。

社会科の学習をより良くしたいと思っているのは、僕も僕以外の皆さんもきっと持っている気持ちだと思います。今回は、大塚先生が大切にされている「子どもの発見」について、一緒に考えていきましょう。

横浜市立港南台第三小学校 山本 雅也



今回のテーマ

「子どもの発見」につながる 教師の手立てについて考えてみよう。



この子ってこんなところがあるんだな。



子どもの発見

どうすればこのような場面が授業で出てくるのかな？



子どもってこういうふうに見えるんだね。

ポイント①

自分の思いを素直に表現できる クラスの雰囲気づくり

発問するとすぐに手が挙がる。教師としてはすごく安心しますね。そこで、すぐに手を挙げている子を指名するということはありませんか。

発問してすぐに指名してしまうと、**一部の子どもたちの発言で授業が進んでいくことになり**ます。待つことを大切にすると、手を挙げたり、自分の意見を話したりしてくれる子どもが増えると思います。

また、「でも、……」や「〇〇さんは、◇◇と言っていたけれど、……」と友達の意見と違う考えを伝えるには、**学級の温かい雰囲気をつくったり、「素直に伝えていいんだ」ということを子どもと共有したりする必要**もあると思います。

ポイント②

子どもの考えをクラス全体に広げる 発問の工夫

たくさん子どもたちが手を挙げて、ある子どもが発言したことに対して、「正解です」「その通りだね」と教師が答えることはありませんか。こうなると、**子どもの意見をつなげ**ることは難しくなります。

子どもの発言をしっかりと聞いて、他の子どもに返すことで、自分の考えを伝える場面を確保できるようになります。「〇〇さんは、◇◇と言ってくれたけれど、みんなはどう思うかな？」のような発問をしてみると、「〇〇さんと同じ考えで、……」や「〇〇さんの考えとは少し違うけれど、……」「◇◇だと思っていたけれど、……」のように発言がつながったり広がったりしていきます。

ポイント③

休み時間や給食の時間など授業ではない時間の過ごし方

振り返りを書いている時や休み時間、給食を食べている時などに、「先生、ぼくは◇◇だと思ったんだけど、……」と話してくれる子どももいると思います。**そのような時は、1対1で話すだけでなく、近くにいる子どもたちを巻き込んで話をするようにしています。**「〇〇さんは、◇◇って言っているけれど、……」と話を振るだけで、子どもたち同士で話が盛り上がることもあります。「続きは、次回の授業でね」と伝えると、次回の授業も楽しみになると思います。



子どもの発見には、「子どもを見取り、子どもの話に耳を傾ける」ことが大切だと考えます。また、子どもの表情を見ることも重要だと思います。教師が、子どもたちとたくさん話をしたり、小さな変化をとらえたりしていくことで、子どもも安心して自分のことを表現するのではないのでしょうか。

そして、一人ひとりを大切にしたい安心できる、クラスづくり・授業づくりに挑戦していきましょう。

社会の中心で石川が大きく叫ぶ!



横浜市立日枝小学校 石川 和之

今回の呼び

特集②

やっぱり社会科は面白い!

大塚先生のお話を伺うと、社会科の授業づくりが本当にワクワクしてきます♪「さらに教材研究してみたい、子どもの話をもっともっと聞いてみたい!」ってゾクゾクしてきます♪ ぜひ、ご一緒にお聞きください(^^) /

呼び1

社会科は、**民主主義を発展し根付かせるための教科です**



大塚: 社会科を考える場合、教科目標を構成している「**民主的**」がキーワードになると考えています。だから社会科

は**対話を大事にする**し、**異論を受け入れる空間を大事にする**。授業そのものが「**理想の社会を体現するような形で成立させなきゃいけない**」という考えを、自分の基本に置いている。そこにプ

ラスとして「教材をどうするか」を考えている。今は逆に「教材や資料をどうするか」を先に考えている人が多いんじゃないかな。

19世紀にアメリカでチャールズ・サンダース・パース(哲学者)が、「INQUIRY」という概念を出した。違和感から問いを立て、仮説を考え、その中でいちばん確からしいものを検討すること。この過程を通して知識が形づくられていくということ。ここで大切なのは、「真理」や「知識」を、最初から固定されたものと考えなかった点だと思う。「**知識は更新されていく**」、そうした前提に立っている。この考え方を、私たちは後に「**探究**」と呼ぶようになった。



ジョン・デューイはこうしたパースの考え方に強い影響を受けた人物。デューイ自身は若い頃に、ヘーゲルなどヨーロッパ大陸を中心に発展した哲学の研究をしていたが、次第にプラグマティズムというパースの考え方に軸足を移していった。当時のアメリカは南北戦争後の急激な産業化に伴う社会的な混乱の時期で、民主主義が本当にうまくいくのか問われていた時代。そうした中でデューイは、民主主義を守るためには「**教育**」が決定的に大事であり、パースに学んだ「**探究**」こそ、**民主主義を守り発展させるための教育**だと考えた。

デューイは、学校を「子どもたちが生きる小さなコミュニティ」ととらえ、そこでの活動的・協同的・問題解決的な学びを大切にした授業の必要性を



唱え、1896年にシカゴ大学の附属小学校、いわゆるラボラトリー・スクールをつくっている。デューイは大正8(1919)年に日本に来ていた。2ヶ月ほど日本に滞在。東京大学や早稲田大学、慶應義塾大学で講演を行った。この来日前後には、彼の考え方は教育の分野で広く受け入れられていた。だから、その考え方に基づいた実践

唱え、1896年にシカゴ大学の附属小学校、いわゆるラボラトリー・スクールをつくっている。

が、成城小学校や玉川学園など日本の私立学校でも展開されるようになっていた。

また同じ頃、アメリカではデューイの考え方を背景に置いた「**ソーシャルスタディーズ**」という教科が生まれた。これは、**民主主義の担い手を育てることを目的とした教科**だった。

戦後すぐの昭和21年に、日本にアメリカの教育使節団が派遣され、教育改革の方向性が示された。一つは、生活そのものを学習の素材にする「**生活単元学習**」、もう一つは「**ソーシャルスタディーズ**」をモデルにした教科。日本はこの「**ソーシャルスタディーズ**」を「**社会科**」と翻訳して新しい日本の教育の中心的な教科として位置付けたわけです。だからこそ**社会科は、民主主義を発展し根付かせるための教科**なのです。「**単なる暗記学習では不十分**」は私の頭の中にいつもある。「**自分のクラスは民主的な空間になっているのか。異論が許され、対話があり、異論を話す他者を大事にできているのか、自分のクラスも授業もそうでなきゃいけない**と考えてきた。デューイたちが社会科を生み出した際に出発点としたもの、それが果たして学級の中で成立しているか。そこが問われています。だから、「**単に『この教材や資料を使えば素晴らしい授業になるよ』というだけの社会科では不十分なんだ**」と思っています。



【社会科の教科目標】

社会的な見方・考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動を通して、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎を次のとおり育成することを目指す。

以下(1)(2)(3)省略

小学校学習指導要領(平成29年告示)解説社会編より

呼び2

ここに注目すると面白い!
~具体的な教材研究の視点から~

<その1> 富岡製糸場の女工たちの身分



大塚: ^{わたえい}和田英が書いた『富岡日記』は今でも出版されていて読むことができます。和田英は長野県松代町の武士の娘。当時、富岡製糸場は全国から人を集めたが、その多くが若い士族の娘だった。それはなぜか。「今後、全国に製糸工場をつくって、彼女たちをそのリーダーにさせたかったので、ある程度の見識やリーダーシップが取れる人が必要だったから」と考えられるわけですね。日本の近代を象徴的にいえば、「品質の良い生糸を売って大砲を買った」と表すことができるのではないかと。これが近代の本質的な姿ではないか。そこまでつなげることができる富岡製糸場や、そこで働く人々の営みは、教材としてすごく面白いと思います。



<その2> 調べてみたい!「消防団の名簿」



大塚: 消防団の名簿も教材として面白かった。消防団は高齢者が比較的多いし、普段仕事を持っているサラリーマンも多くいます。3年生は火事の時に消防団が出動すると思っているから、「いざというときすぐに出勤できるのかな?大丈夫なのかな」と問いが生まれてきた。調べていく中で、火を消すということは消防士の役割で、火を出さないということが消防団の役割ということが明らかになってきた。「これも立派な協働ではないか」、そんな発見を子どもができる教材だと思います。



<その3> 「規則ときまり」も面白い!

大塚: 規則やきまりも、教材としてすごく面白い。特に歴史の学習。横浜の居留地に「外国人と口をきくな」「外国人にものをもらうな」という看板が立てられていた。子どもたちは「どうして? 仲良く暮らせばいいじゃないか」と考える。この問題を追究すれば、幕府による情報や利益の独占が見えてくる。あるいは、「御成敗式目」。その第一条は「神社を修理し、祭祀を専らにすべきこと」だが、これはいったいどういうことだろうと考えるようにする。当時の神仏に対する意識が高いことがわかる。きまりを見るとその時代が見えてくる。



<その4> 知っていますか? 「小学校設置基準」

大塚: 小学校に設置が義務付けられている施設は法律で決められている。例えば保健室や学校図書館など。「なぜその施設なのか。こうじゃないか?」という子どもの発言が教材になる。法律や規則が生活の中にあることに気付く。小学校設置基準は「学校教育法」に、学校教育法は「教育基本法」に、教育基本法は「日本国憲法」に基づいている。結果的に日本国憲法と自分たちの暮らしが繋がっていることに気が付く。私は調べているうちにこの体系に気付いた。法律やきまりを子どもたちは嫌うが、その網の目の中に我々の生活がある。その大元に日本国憲法があるということが明らかになってきます。

<その5> 着目! 「裁判所の席」

大塚: 「愛のチョーク」のコーナーでも少し触れたけど、裁判所を写した1枚の写真から問題が生まれてきたこともあります。裁判所傍聴席の最前列は、新聞記者

席。それはなぜか? 裁判の公開としてマスコミを通して国民に知らせるために、一般者より新聞記者が優先される。



「傍聴席があるのはどういうことなの?」と問うのも面白い。これも、裁判の公開ということが日本国憲法に定められている。ここでも、憲法とのつながりが見えてくるようになります。

<その6> そんな教材探し、どうやって?

武藤: 子どもたちが、自分の生活につながりがあると感じる教材はどう見つけていますか?

大塚: まずは、自分が面白いと思うかどうかで判断しています。それがまさに「探究心」なのでは。裁判所の席については学生が持ってきた写真で知りました。吉田新田の埋め立て前の絵図を見て、埋め立て前の村の様子について授業をしたが、すごく面白かった。村の様子から新田がつくられる必然などを考えるのは面白かったね。

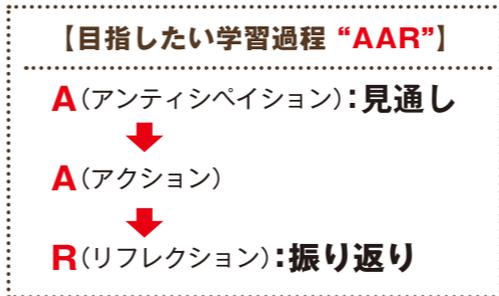
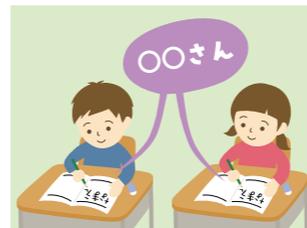
叫び3

子ども自身の学びの振り返り、工夫次第でどの子もワクワク!

山本: 学習の振り返りで気を付けていたことはありますか?

大塚: ここ10年くらいの教育心理学の成果で「AAR」というのが学習の過程の基本に据えられている。A(アンティシペーション=見通し)、A(アクション)、R(リフレクション=振り返り)。この過程は、今の学習指導要領のキーワードにもなっている。見

通しを持って学習させることは効果があることは、教育心理学の中でエビデンスが示されているようだ。OECDのラーニングコンパス2030では、育むべき能力としてagency(行為主体性)が示されている。そのための学習の過程としてAARを提唱した。それを「見通しと振り返り」と翻訳して学習指導要領に反映させている。最後のR(リフレクション=振り返り)は非常に大きな意味を持っている。今は振り返りを次の見通しにつなげることがすごく大事といわれている。「振り返りをどう書かせるか」という課題については、「今までの自分、今の自分、これからの自分」という観点で振り返りを書くことを試みてきました。これは、早稲田大学の藤井千春先生に教わったことです。自分なりに工夫を加えたのは、「振り返りの中に必ず友達の名前を入れるように指導した」ということかな。あらゆるところで、子ども同士の関係性を可視化した。



最近、振り返りを書く時間と振り返りの発表の時間に関心があります。振り返りを書いている時に教室を歩きながら「今日の勉強はどうだった?」と聞いて回る。個別に会話をする。「みんな、ちゃんと聞きなさい」などの指導はしない。でも、他の子どもはそれを聞いています。大学での講義でもこの方法をとっている。時間を有効に使えることを実感している。「人が話している時はちゃんとそちらを見る」というような常識も、いったん疑ってみると別な側面が見えてきます。

武藤: 振り返りを書いていない子どもを気にかけてきましたが、書いていない子どもは、書いている子どもと教師の会話をヒントにして書くこともできま



叫び4

教科書の友達の発言、教室の友達の発言、どちらも素敵な教材!

大塚: 「教科書の友達(教科書のキャラクター)はどのようなふう勉強を進めているだろうか? 何と言っているだろうか?」と聞くの良いのでは。教科書の友達を「共に学ぶ仲間」としてとらえるということ。教科書はそういう活用方法もあると思う。授業の所々で「教科書は役に立つだろうか?」というのでも良いでしょう。教材として教科書を機能させるとはそういうことではないか。同様に「〇〇さんの言っていることって役に立つかな?」とよく聞いていたが、これは、〇〇さんの発言も一つの教材だということを示している。資料提示の時、小学生はそれまでの追究の文脈を抜きにして、新しく出た資料について直接的な解釈をし始めるでしょ? だから、「今までこの問題について考えてきたきみたちにとって、この資料って役に立つの?」って聞いてあげると、これまでの文脈を無視しない形で授業が進みます。

石川: 「教科書は役に立つ」という前提で使うからつまらないですが、「どうやったら役に立たせられるんだろう」という視点で使ったら面白いですね。





YUKIKOの部屋

Check point!



大塚先生と社会科と私

大塚先生と初めて出会ったのは、私が初任校に勤めていた時でした。校内の研究を通して社会科の面白さを感じ、これからもっと学んでいきたいと思っていた頃です。

先生からは、子どもたちのことを第一に考え、子どもたちの学びのために教師ができることをたくさん教えていただきました。また、子どもたちだけでなく、私たち教師や、教職を目指す学生の学びもとても大切にしてください。さらに先生は、講演会や授業研究会などのご助言だけでなく、日々のコミュニケーションの中で私たちの話を聞いて考えを伝えてください。思いを受け止めてくださるので、安心してつい話すぎてしまいます。先生と話すことで、自分が考えていることを整理したり、新たな視点を持ったりすることができます。私のように、先生と出会ったことで授業観が変わった教師がたくさんいると思います。そんな先生のお話を今回お聞きすることができて嬉しく思いました。

座談会の中で、「ある学生が……」「ある子どもが……」と、学生や子どもたちのお話をしている時の大塚先生の優しい表情が印象的でした。これこそが「子どもの表現」ですね。子どもたちが葛藤しながら自分の思いを素直に語り、それを周りの子どもや教師が受け止め、一緒に考えていく……そのような学び合いが素敵だなと思いました。



私も日々授業をしていて、「この子はこんな一面もあるんだな。こんな考え方をするんだな」と思うことがあります。それは、気付かないとそのまま流れていってしまうものだと思います。大塚先生のお話を聞いて、日頃から子どもたち一人ひとりをしっかり見取り、その子の素直さをその子自身や周りの子どもたちに返していきたいと改めて思いました。また、私も教師として、人間として、探究心を持って学びを楽しんでいきたいと思いました。今、目の前にいる子どもたちはもちろん、教師をはじめとする周りの人たちと、一緒に驚いたり、感動したりする日々を大切に生きていきたいです。

(横浜市立本牧小学校 武藤 由希子)



「楽しい学び de クラスをつくる」では、みなさんからの質問をお待ちしています！
(連絡先: 北学場) kitamanaba@gmail.com



※本冊子に掲載しているイラストはすべてイメージです。

楽しい学び de クラスをつくる (vol.10)

日文教授用資料 [小学校社会]
令和 8 年 (2026年) 3月2日発行

編集・発行人 佐々木 秀樹

日本文教出版株式会社
〒558-0041 大阪市住吉区南住吉 4-7-5
TEL: 06-6692-1261
FAX: 06-6606-5171

本書の無断転載・複製を禁じます。

CD3111110070

日本文教出版株式会社

<https://www.nichibun-g.co.jp/>

大阪本社 〒558-0041 大阪市住吉区南住吉 4-7-5
TEL: 06-6692-1261 FAX: 06-6606-5171

東京本社 〒165-0026 東京都中野区新井 1-2-16
TEL: 03-3389-4611 FAX: 03-3389-4618

九州支社 〒810-0022 福岡市中央区薬院 3-11-14
TEL: 092-531-7696 FAX: 092-521-3938

東海支社 〒461-0004 名古屋市中区葵 1-13-18-7F-B
TEL: 052-979-7260 FAX: 052-979-7261

北海道出張所 〒001-0909 札幌市北区新琴似 9-12-1-1
TEL: 011-764-1201 FAX: 011-764-0690